

学位論文の要約

論文題目 ゲルマン語における動詞接頭辞 ge- —機能的衰退についての通時的考察—

申請者 野添 聡

本稿の目的は、ゲルマン語において動詞接頭辞 ge- が持つとされてきた完了相（アスペクト）を表す機能がどのように衰退し、類似形式と考えられる分析的な現在完了形とどのように交替したか、その過程を通時的な視点から解明することにある。

論文の導入部分では、本研究を行った背景として、印欧語から見たゲルマン語における動詞体系の特異性と、研究の課題点について述べた。印欧祖語の動詞体系はアスペクトの区別を中心に構成されていたが、ゲルマン語では時制を中心とした動詞体系へと変化した。その結果、元来、動詞活用形によって示されたアスペクトの区別は、ゲルマン語では動詞に接頭辞 ge- を付加することで表されるようになった、と考えられている。

現代のゲルマン語に目を転じれば、例えば現代ドイツ語における接頭辞 ge- は過去分詞の指標となっており、上述のようなアスペクトの差異を表す機能を持っていない。このことから、接頭辞 ge- はゲルマン語の歴史において、完了相を表す機能を失って衰退したと考えられる。この点について、先行研究の吉田 (1980) では、接頭辞 ge- が完了相を表す機能を失った結果、ゲルマン語では類似する機能を持つ形式として助動詞を用いる現在完了形が発達し、完了を表す機能が補われた、と考えられている。本稿は、接頭辞 ge- と現在完了形の機能的な類似性、ならびに接頭辞 ge- の機能的な衰退の過程について考究したものである。

第1章では、ドイツ語史の最古層をなす古高ドイツ語 (750-1050年頃) の文献である『オットフリートの福音書』の分析に基づいて、接頭辞 ge- の機能ならびに接頭辞 ge- と現在完了形の機能的な類似性について考察した。

まず第1章第1節では、先行研究における議論を踏まえ、本章の考究課題を明確にした。古高ドイツ語期の動詞接頭辞 ge- については、完了相を表す機能に関して研究者の間で見解が対立しており、実際にどこまで完了相を表す機能を持つか疑問が残る。このため、接頭辞 ge- を持つ動詞 (ge- 動詞) と現在完了形の機能面での比較に先んじて、まず接頭辞 ge- の機能を解明する。

第1章第2節では、分析の方法論について記述した。本研究では、まず『オットフリートの福音書』に現れる接頭辞 ge- の用例をすべて記述した。さらに、接頭辞 ge- の分析に先んじて、Schrodt (2004) や Comrie (1976) などの記述を参考にしてアスペクトの定義を行った。この定義によると、アスペクトは動作の内部構造や状況に着目する「未完了相」と、動作を一つの総体として外部から捉える「完了相」に大別される。完了相には、動作の開始や完結・結果などを含意する下位区分があり、動作の完結・結果を表す ge- 動詞の用例は現在完了形と機能上の接点を持つことが想定される。このことから、動作の完結や結果を表すアスペクトを本稿では「完結相」と呼んで区別する。

実際の分析に際しては、ge- 動詞を現在完了形と比較する観点から、考察対象を ge- 動詞の直説法過去形に限定した。また、本研究では同一の基礎動詞の用例に基づき、Simplex（接頭辞を持たない動詞）と ge- 動詞を比較することで、接頭辞の意味機能を解明することを試みた。そのうえで、各用例の判断に際し、接頭辞 ge- の機能を裏付けるために、文献の成立と密接に関連すると考えられるラテン語文献との対応関係を調査した。

第1章第3節では、『オットフリートの福音書』全体の調査から得られた動詞接頭辞 ge- の用例について分析を行った。ge- 動詞の用例には、Simplex との比較のみからは接頭辞の機能が明確とされない用例も在証される。さらに、『オットフリートの福音書』がラテン語文献の厳密な翻訳ではないために、ラテン語と密接に対応しない用例もある。このため、ラテン語の文献と厳密に対応する ge- 動詞のみに着目し、古高ドイツ語とラテン語の対応関係を記述した。この調査の結果、ラテン語文献と厳密に対応する ge- 動詞はラテン語の完了形に対応する傾向があり、接頭辞 ge- は完了相を表す機能を持つと考えられる。

第1章第4節では、ge- 動詞の用例との比較に先んじて、古高ドイツ語における現在完了形の発達についてまとめた。本節では、『オットフリートの福音書』に現れる „habên“, „eigan“, „uuesan“ を助動詞とする完了形の全用例を記述した。

第1章第5節では、第2節で定義した「完結相」を表す接頭辞 ge- の機能について論究し、ge- 動詞と現在完了形の用例を比較した。まず、本節では第3節においてラテン語との対応関係を記述した ge- 動詞の用例の中から、現在完了形との比較に適した用例を分類し、現在完了形の用例と比較した。その結果、ge- 動詞の用例と分析的な現在完了形の用例は、ラテン語との比較において、いずれも動作の完結や結果状態を表し、ge- 動詞と現在完了形は意味機能上の接点を持つ。

第1章第6節では、ge- 動詞の用例と、分析的な過去完了形の用例を比較した。従来の研究では、ge- 動詞の過去形が過去完了を表す、との指摘が繰り返されている。本研究の調査範囲にも、ラテン語の過去完了形に対応する ge- 動詞の用例が在証され、ge- 動詞が過去完了形とも機能上の接点を持つことが確認された。

以上の議論を総括し、第1章第7節では、ge- 動詞が衰退の過程において現在完了形ならびに過去完了形と機能上の接点を持っていたと結論した。

第2章では、ge- 動詞の機能と動詞目的語における格の機能との関係について論究した。

第2章第1節では、本章で行った研究の背景と、先行研究の動向について述べた。とりわけ、本節では Leiss (1987, 2000, 2007), Donhauser (1990, 1998), Schrodtt (1992, 1996, 2004) の議論を概観し、先行研究における主な論点と、分析の問題点について論じた。先行研究では、動詞目的語における属格・対格の差異が、動詞のアスペクトに影響を及ぼす、と考えられている。しかし、先行研究では目的語における属格・対格の意味機能について見解が対立しており、さらなる研究が俟たれている。このことから、本研究では接頭辞 ge- の意味機能と動詞目的語における格の機能との関係を考察した。

第2章第2節では、分析に先立って、分析対象となる言語におけるアスペクトについて述べた。とりわけ、本稿の考察に関わるギリシア語とラテン語では、ラテン語において現在完了とアオリ

ストの形態上の区別が失われたため、本稿ではギリシア語、ラテン語の現在完了形・アオリスト形を「完了相」と総称し、未完了過去形による「未完了相」と対比した。

第2章第3節では、分析の方法論について述べた。本研究では、ギリシア語から翻訳されたゴート語の『聖書』(4世紀)および、ラテン語原典から翻訳された古高ドイツ語の文献『イシドール』、『タツィアーン』、『ムルバッハ賛歌』、『ベネディクト修道会会則』、ノートカーによる翻訳文献群、『ヴィリラムの雅歌注解』を考察対象とし、文献中に現れる直説法過去形の *ge-* 動詞ならびに *Simplex* の用例をすべて収集した。そのうえで、各動詞の用例を翻訳原典の動詞活用形ごとに分類し、さらに動詞目的語との共起の観点から、各用例を目的語の有無ならびに目的語の格ごとに分類した。

第2章第4節では、先述の調査結果に基づいて接頭辞 *ge-* の機能的な変遷に論及した。本稿の調査結果によれば、ゴート語と古高ドイツ語を比較した場合、古高ドイツ語では原典の完了相に対応する *ge-* 動詞の用例が減少し、原典の完了相に対応する *Simplex* の用例が増加した。その結果、古高ドイツ語では、*ge-* 動詞と *Simplex* の各用例とラテン語原典における完了相の対応の割合にほとんど差がない。このことは、古期ゲルマン語から古高ドイツ語の時代にかけて、接頭辞 *ge-* が完了相を表す機能を失ったことを示している。他方、古高ドイツ語の *Simplex* に着目すると、対格目的語と共起する *Simplex* には原典の完了相に対応する傾向が認められる。この傾向は、Donhauser (1990) の指摘と一致する。

第2章第5節では、動詞接頭辞 *ge-* の機能と目的語における格の機能の関連性について論じた。先行研究では、目的語における属格・対格の機能的な差異が、動詞の未完了相・完了相と関連する、と考えられている。属格の機能については、用例の不足から判断しかねるが、前節で述べた調査結果から、対格には完了相との結びつきが認められる。ゴート語と古高ドイツ語の調査結果を比較すると、ゴート語では対格目的語の共起と原典における完了相との対応に相関関係は認められない。他方、古高ドイツ語では原典の完了相に対応する *ge-* 動詞の用例における、対格目的語との共起例が増加した。古高ドイツ語では *Simplex* の用例においても、対格目的語と共起する動詞の用例が原典の完了相に対応する、という傾向が認められることから、対格目的語は動詞のAspect決定において完了的な意味を付与したと考えられる。

以上の議論を踏まえ、第2章第6節では、古高ドイツ語において接頭辞 *ge-* の完了相を表す機能が衰退した一方で、対格目的語が動詞に完了的な意味を付与し、目的語における対格の機能が接頭辞 *ge-* の機能を補ったと結論した。

第3章では、古アイスランド語における小辞 *of* の機能と現在完了形の機能について論じた。

第3章第1節では、先行研究の主な論点を踏まえたうえで、本研究における考究課題を示した。古アイスランド語を含む北ゲルマン語では、現存する文献が成立した時代以前に、接頭辞 *ge-* が失われた。このため、先行研究では、古アイスランド語では接頭辞 *ge-* に代わる完了表現の形式として現在完了形が発達したと考えられている。他方、古アイスランド語に関する研究では、接頭辞 *ge-* の後継形式として小辞 *of* が挙げられている。とりわけ、小辞 *of* について考察した代表的な研究である Kuhn (1929), Dal (1930a, 1930b) では、小辞 *of* が接頭辞 *ge-* に代わる形式とし

で発達した、と考えられている。しかし、当該の研究では、小辞 of の完了相を表す機能について見解が対立している。このため、本研究では、小辞 of の機能を検証することで、北ゲルマン語における接頭辞 ge- の衰退と、代替形式の発達を跡付ける。

第3章第2節では、分析の方法論を述べた。本研究では、古アイスランド語の代表的な文献である『詩のエッダ』に現れる小辞 of の用例を収集し、直説法過去形の動詞と共起する用例に限定して分析を行った。続く第3章第3節では、本稿の調査で得られた実例に基づいて、小辞 of の機能を分析した。実際の用例分析では、同一の動詞の用例に基づき、小辞 of の共起の有無とアスペクトの区別の関連性を考究した。その結果、個別の用例レベルでは、小辞 of の共起がアスペクトの区別に関連すると考えられる用例も見いだされる。しかし、小辞 of がアスペクトの弁別に関与すると考えられる用例はわずかであり、小辞 of の機能が明確とならない用例も見いだされる。このことから、小辞 of は完了相を表す機能を持つとは考えられない。

第3章第4節では、小辞 of の機能と助動詞を用いる現在完了形の機能を比較した。古アイスランド語では、hafa (nhd. „haben“) を用いる現在完了形が発達している。本節では、『詩のエッダ』に現れる hafa を用いる現在完了形の用例をすべて収集し記述した。そのうえで、小辞 of と共起する動詞と同一の動詞過去分詞を用いる現在完了形を比較した。その結果、小辞 of の用例ではアスペクトの区別が曖昧になるのに対し、現在完了形ではアスペクトの弁別が明示される。

以上の議論を踏まえ、第3章第5節では、古アイスランド語における接頭辞 ge- の代替形式は、小辞 of ではなく現在完了形であると考えられると結論した。

以上で述べた第1章から第3章までの議論を総括すると、接頭辞 ge- の衰退の様相は以下のようにまとめられる。つまり、ゴート語に代表される最古期のゲルマン語では接頭辞 ge- が完了相を表したが、接頭辞 ge- は歴史の推移とともに完了相を表す機能を失って衰退した。その機能的な衰退の過程において、古高ドイツ語期の接頭辞 ge- は、現在完了形ならびに過去完了形と機能上の接点を持っていたと考えられる。また、接頭辞 ge- の意味機能は、動詞目的語における格の機能とも関連しており、衰退した接頭辞 ge- の機能は対格目的語との共起によって補強された。しかし、接頭辞 ge- の機能的な衰退はとどまることなく、ge- 動詞は現在完了形に取って代わられた。接頭辞 ge- の衰退が顕著であった北ゲルマン語では、現在完了形が接頭辞 ge- の代替形式として機能した。

接頭辞 ge- の代替形式の役割を担ったと考えられる現在完了形は、現代ドイツ語を見ても明らかのように、後代の個別言語において過去時制に関する表現へと変化を遂げている。ゲルマン語において接頭辞 ge- が衰退した根本的な要因は、ゲルマン語が本来的に持つ、アスペクトを中心とした動詞体系から時制を中心とした動詞体系への変化の方向性と関連する、と考えられる。